

げんこつ通信

第5号（2026年9月4日発行）

★8月の選考委員会にて、応募者2名の奨学金採用が決定しました。応募者本人と熊本高校宛てに採用決定通知の発送もされています。2人にとって奨学金が充実した高校生活の一助になるよう心から願っています。

◆ 寄付者からのメッセージ3人目は徳島県の坂東正章先生です。くまもとげんこつ奨学金は坂東先生が設立された徳島ハート奨学金がモデルです。坂東先生が基金を設立されるに至った経緯や奨学金にこめられた思いについて語っていただきました。

♥ 君の笑顔が見たいから 坂東正章（坂東ハートクリニック院長）

げんこつ奨学金創設者の高村先生とは30年来の親友です。私が始めた奨学金制度について、この場を借りてお話しさせていただきます。

私の両親は私が小学校に入る前に離婚しました。その当時、母の収入は洋服の仕立て代だけでした。私が小学校高学年の時、母は生命保険の外交員になり、合間に学習塾で英語教師としても働きました。母はアメリカ生まれで、14歳のときに日本へ帰国したため、英語は完璧でした。母は3つの仕事をしながら三人の子供を育ててくれました。



子どもながらに、家が貧しいことには気づいていました。庭で遊んでいた時「早く家の中に入って！」と母が叫びました。その後、玄関の扉をドンドンたたく音がします。「声を出したらいかん」と母に言われ、母にしがみ付き震えながらじっとしていました。借金の取り立てだったのでしょう。とても怖かったことを覚えています。

また、給食費などを支払えないこともよくありました。「なぜきちんと出さないの？」と担任に問われ、私は「忘れました」と答え、嘘をついて母を守ろうとしました。また、鉛筆は小指ほどの長さになるまで使っていました。担任はそれに気付いたのでしょう。放課後一人だけ残るよう指示し、校内の購買部に連れて行きました。担任は入口や窓を塞ぎ「必要な文房具を持って帰りなさい」と言ってくれました。お金は不要とのことで、鉛筆、消しゴム、色鉛筆、クレヨンなど、普段はとても入手できない物をいただき、喜んで帰りました。

このように、母子家庭での厳しい生活を経験した私は、いつか母子家庭の子供を応援したいと思うようになりました。医学部卒業後、心臓血管外科医として勤務したのちに開業し、医院の経営も安定したことから、母子家庭の子どもたちを支援する奨学金制度を作ることにしました。しかし個人でその制度を作って運営するのは非常に困難だとわかったため、徳島新聞社会文化事業団に依頼しました。

自分の資金力やこれからの人生を考え、毎月の奨学金を支給し続ける制度ではなく、入学に際しての入学金等の諸費用を負担する制度としました。対象は徳島県内の母子家庭で育ち、大学、専門学校に進学する高校生で、選考は徳島新聞社会文化事業団に県内の学識経験者が加わって行い、各

高等学校長からの推薦を受けた生徒の中から毎年2名に、各50万円を給付する制度にしました。返金の義務はなく卒業後の進路拘束もありません。

2019年からこの制度を始めましたが、当院の患者さんや他県の方からもご寄付をいただき、最近では毎年8名前後の高校生に奨学金を給付できるようになりました。若い人たちが経済的な不安にとらわれず、自分の人生を自分らしく歩んでいけるように、微力ながら、これからもこの活動を続けていきたいと思っています。そして、いつか彼らの笑顔を見ることができれば、これほどうれしいことはありません。

♣ 坂東ハートクリニック HP : <https://www.bandoheart.jp/>



【ご寄付の御礼】 本基金の趣旨にご賛同いただき、心より御礼申し上げます。

志方猪一郎様(東京、高30)、神崎哲也様(北海道、高30)、坂本泰二様(鹿児島、高30)、上野敬輔様(千葉、高30)、M.N.様(熊本、高30)、宮本直彦様(東京、高30)、坂東正章様(徳島、一般)、M.N.様(2回目)、横山透様(熊本、高30)、甲斐豊様(熊本、高31)、横田真様(東京、高30)、坂口倫章様(熊本、高30)、匿名の方1名

(2026年8月現在、2026年度寄付順)

「経済的な理由で進学や学校生活をあきらめてほしくない——」そんな思いから、この奨学金は支えられています。本基金の趣旨にご賛同いただける方は、ぜひご支援・ご寄付をお願いいたします。

※寄付の方法等については基金管理者にお問い合わせください。

(基金管理者：高村政志)